

南海研だより

No. 9

1983年5月

学術調査隊の草の根交流

岩切成郎 (南海研センター長)
(調査隊代表者)

第2次調査隊を谷山の阜頭で見送ってから私は別途空路で後を追ひ、フィジー、ソロモンでは調査隊の受入れ準備や公式行事に参加したり、いわば不即不離の日程をすごした。

先行して調査船を出迎えた経験はアンボン、ナウル、パラオそれに昨年度のスバと繰返してきたが、船が繫留され隊員と言葉を交わすまでは何とも不安なものである。本年度からその役割からも解放され少し感慨を覚える。

こんなアウト・サイダーの傍目八目で眺めると、このセンター調査隊は何とも大掛りで雑然たる集団に見えてくるし、かごしま丸の容姿も頼もしいやら心細いやらである。まして日本の研究組織や調査方法に不慣れな外国人(知識人)から見ると、調査隊の全体像すなわち人文、社会、自然などで混成された組織は不明確で成果も危惧されるらしい。それでも行動開始されると活気づき機動化するもので、成程これが日本の調査かということになる。

フィジー、ソロモンはそれほどでもないが東

・西南アジアでは身分的階層性が根強く、それに宗教と民族の関係も入って、エリートの大学研究者は体や服をよごしてまで辺地や大衆に融けこもうとし難い条件がある。そこにいくと日本人研究者はあまり社会的エリートでもないし、禁忌・タブーの類も無いので知的好奇心のある限り何処へでも飛びこんで行けるし、それが行動原理みたいになって最近ではアジア各国の若手フィールド・ワーカーに影響をあたえている。

そこで我々が配慮しなければならないことは峻岳、絶海でないかぎり、大概の場所は人間社会とかかわりを持っていて、近代法の私有ではないが慣習による資源の利用と管理が存在していて、勝手に採捕や侵入は許されないということである。調査隊が入る山林、原野、河川、海面でのサンプル収集も、多くの場合事前の了解や黙認があつてこそ、現地の住民はにこやかに応対しているのである。この辺の呼吸が人間仲間としての最低の相互理解すなわち草の根交流であり、この種の調査隊に先発コーディネーターが必要な所以である。

第2次「オセアニア海域における水陸総合学術調査」について

片山忠夫（調査隊々長）

南海研センターが主催する「オセアニア海域における水陸総合学術調査」の第2次調査は、フィジーとソロモン諸島で実施された。調査隊員は法文・医・歯・理・工・農・水産の各学部と南海研から教官・事務官・大学院生が参加し、更に学外からは神戸大学・京都大学・弘前大学・民族学博物館の教官が参加し、合計50名の大世帯であった。調査隊の構成は、自然班18名、農業班6名、水産班8名、社会・文化班8名、医学班9名、事務官1名と成った。昨年同様水産学部の調査練習船かごしま丸に乗船し、1982年11月10日より同年12月21日までの全42日間の行程であった。

本調査は文部省の特定研究経費によって行われたものである。昨年度に引続きこのような大規模な調査が実現した背景には、学長を始め関係諸氏の並々な御尽力の賜物があった事を明記し、ここに隊員一同を代表して深謝の意を表する次第である。

各班の調査項目の概略は次の通りである。

自然班—南太平洋海域の海洋構造の把握、及び
両国における海洋生態、生物生産に関する研究。

農業班—両国における農業生産性、農業形態、
熱帯作物及び土地利用の研究。

水産班—両国における水産生物生態、増養殖、
及び漁法などの研究。

社会・文化班—両国における漁村の社会構造、
土器の分布、建築様式、言語及び海洋
政策に関する研究。

医学班—両国における公衆衛生、医動物及び人
体病理に関する研究。

今回の調査は第1次隊同様、フィジーに本部
を持つ南太平洋大学との共同研究である。しか
し我々の調査項目が多岐に亘るため、同大学の

ほかに、農科大学、医科大学、政府関係機関も
協力参画した。これらの協力を得て調査は成功
裡に無事終了した。

フィジーの首都スバに入港直後、船上でカバ
の儀式によって歓迎された。これは我々を友人
として受入れる伝統的かつ重要な儀礼の一種で
ある。この儀式に始まり、ソロモン諸島の首都
ホニアラで行われたレセプションに到る期間、
各隊員とも目まぐるしく東奔西走したが、全員
が最後まで健康を維持し続け得たことは誠に幸
いであった。

両国は民族構成、独立後の発展の歩み、産業
構造などさまざまな面で類似点と相違点とが混
在している。このような背景をもつ国々を並列
的に調査するには慎重な配慮が必要である。ま
た基礎的研究を柱とする調査項目も、論議の過
程で実用的な分野にまで間口が広がり、調査や
助言を求められる局面も多々みられた。また、
調査期間中に示された先方の熱意に報いるため
現地調査で得た知見が一過性のオハナシに留る
ことなく、今後息の長い接触を続け、長期的見
地から第1次産業は言うに及ばず、文化・社会
的面でも、調査団の生活向上に貢献し得るよう
努力すべきであろう。

洋上では全隊員が交代で話題を提供する洋上
学部も連日実施した。他人の研究課題や物の考
え方などを理解することによって、自分の調査
の位置付けを明確にし、広い視野に立ち総合的
判断に裏づけられた成果を纏めるよう企画した
ものであり、これぞ正にこの形式による調査活
動における真骨頂である。今回の調査成果は5
月に速報として公表するが、それが第3次以降
の調査と、南海研の将来にとって良き糧と成る
ことを念願する次第である。

一味ちがった南海研の特定研究

平田八郎（調査隊副隊長）

今回の第2次調査を終えて、私は、のべ7回もの文部省特定研究調査に参加したことになる。南方カツオ調査3回（NAV 74～77）、琉球弧調査2回（NAV 78～79）、そして本オセアニア調査2回（NAV 81～82）——いずれも水産学部付属のかごしま丸や敬天丸の運用によるものである。今、それらの調査を振り返ってみると、なぜか、南海研の特定研究には一味ちがったものが感じられる。そのちがいを私なりに考えてみると、端的に言って、親方日の丸であるか否かではなかろうか。そのような根本的な相違が本調査の節ぶしに具現されたものと思われる。

南海研は7年間の時限つきでスタートした施設であり、恒久的な各学部や教養部などとは全く異なったフィロソフィのもとで研究活動をすすめなければならない。南海研は決して7年間で終止符を打ってはならない。それにはなんとと言っても実績が大事である。この特定研究はその実績に直結するものである。第2次調査ではそういう意気込みがひしひしと感じられた。それは、大変いい傾向である。以下に他の特定研究と一味も二味も違っている点を列記してみる。

インテグレーション（統合）の必要性

南海研の特定研究は「一般公募」を原則としている。従って参加隊員の専門分野が極めて多岐に及ぶことになる。それ故調査活動のインテグレーションが心要になってくる。このことは昨年度の第1次調査でも言及されてはいたが、今回は第2回目の調査でもあり、それに関する討議が盛んであった。特に松田隊員のフレッシュな意見が人目を引いた。

結局のところ、多少のことは踏えながら全体的な統合にむけて努力する、という方向で一応の幕になったようである。それにしても、さす

が南海研の特定研究である。インテグレーションについてこれほど盛んに討議されたのは、私にとって初めてである。今後、隊員募集前にもこの問題を討議すれば、よりよいインテグレーションが可能になるものと思われる。

隊員組織上の特色

隊員組織のことも南海研特定研究の大きな特色である。つまり、教務補佐員や外部教官が全隊員の1/2以上も占めている特定研究は他に類がない。特に大学院生や研究生らが教務補佐員制度の適用によって正隊員として調査に参加できるようになっている。これは大学事務当局の絶大な御尽力によって実現したものであり、改めて関係諸官に感謝の意を表したい。こういうすばらしい制度はいつまでも継承したいものである。

第2次調査隊に参加した大学院生等は9名であり、また外部教官は5名であった。いずれも第1次調査隊より1名ずつ減員になったことはかえすがえすも残念なことである。大学は申すまでもなく教育と研究の場であるので、大学院生等がこのような特定研究に参加するのは当然のことである。また、研究内容にもよるが、教務補佐員の有無が成果を左右することもある。彼らの活躍に期待を寄せている。一方、南海研は学内共同利用施設であるから学内教官を優先するのが当然かもしれない。しかし、南海研の省令化申請時に類似施設を申請したライバル大学が幾つもあったのであり、あまり我儘ばかりは言っていられない。南海研の将来のためにもある程度の外部教官の導入は極めて大事なことである。

調査隊事務局報告

中野和敬(事務局長)・井上晃男(コーディネーター)

昭和57年度の文部省特定研究経費により本研究センターが中心となって実施した「オセアニア海域における水陸総合学術調査」の第2年次(通称 NAV '82)は前年度と同様水産学部所属の調査練習船かごしま丸を活用し、フィジーとソロモン諸島で期待どおりの成果をあげ、無事終了した。かごしま丸の出入港日、航海中の活動等を以下に記す。

昭和57年11月10日鹿児島港出港

昭和57年11月25日フィジーのスバ港(ビチレブ島)入港

昭和57年12月1日スバ港出港

昭和57年12月6日ソロモン諸島ホニアラ港(ガダルカナル島)入港

昭和57年12月9日ホニアラ港出港

昭和57年12月21日鹿児島港帰港

かごしま丸による洋上観測はホニアラ港からの帰路、東経160°線沿いに南緯7°より北緯7°までの区間中の12ステーションで行なわれた。

調査隊長は農学部の片山忠夫教授であったが、岩切成郎センター長は別途フィジーに入国し、12月9日ホニアラ出港まで調査隊が陸上活動を行なっている期間中、この特定研究の代表者として隊と行動を共にした。また、本センターの井上晃男教授は調査隊がフィジーに到着する前から現地へ赴き、南太平洋大学を始めとする本調査の共同研究機関のスタッフと隊の実際の活動に関し、最終的な打ち合わせを行なった。

(中野)

調査隊を乗せたかごしま丸の出港を見送った後、11月16日鹿児島を出発して空路フィジーに向った。私の役目は、調査隊の到着前に現地の研究者と十分な打合せを行ない、調査活動が円滑に実施されるように準備をすることであった。

今回の調査隊のように、調査隊員の数が多く、また調査・研究分野が多岐にわたる場合には、現地との文書、電話等による連絡だけで調査予定を決定しても不満足な結果に終ることが多く、1～数人が先発して、現地の共同研究者との密接な連絡のもとに、研究班あるいは個人ごとその調査地、調査方法、日程などの詳細を検討することが必要である。とくに短期間の滞在でより効果的な研究・調査活動を行なう場合には一層この感が深い。

予め各隊員、研究班から提出された希望調査項目、調査地などを基に、協力してもらえる現地研究者の都合、利用可能な車・船の数などを勘案しつつプログラムを作成する訳であるが、このようにして最終的な案ができ上がったとしても、いざ実際に調査を始めてみると、種々の事情でその通りには活動が行なわれ得ないことが多い。このような際には、各隊員がその時々で判断してプログラムとは別の行動をとることになる。幸い今回は海外調査の経験の豊富な隊員が多かったこと、またそうでない隊員の場合にも、その場その場で適切な判断がなされ、むしろ予定した以上の調査活動が行なわれた。先乗りコーディネーターとしての役目を十分に果たせなかった私としてはこれらの隊員各位に心から感謝の意を表する次第である。

今回の調査が比較的順調に行なわれたのはひとえに南太平洋大学とくに海洋資源研究所各員の骨身を惜しまない協力による。中でもL.P.Zann博士及びS. Singh氏にはとくに世話になった。また同様に調査期間中、各研究班の方々と行動を共にし、私達の研究・調査活動に御協力頂いたフィジー医科大学、CWM病院、フィジー政府農政局などの職員の方々に厚くお礼申上げる。

(井上)

フィジー・ソロモン学術調査隊報告

を伴う。

フィジーにおけるインド系住民の生活様式は、顔こインド国内を旅行していると錯覚を起すほど似ているが、インドにおける

てのみサトウキビの栽培が行われていたが、最近メラネシア系住民

園で実施され、調査隊は五十
 人、そのうち神戸大学、京都大
 学、弘前大学、民族学博物館から
 計五人の教員が鹿児島大学以外の
 隊員として参加した。隊の構成
 は、自然班十八人、農芸班八人、
 水産班八人、社会・文化班八人、
 医学班九人、事務官一人であつ
 が、調査項目が多岐にわたつた
 ため、同大学以外に、農科大学、
 医科大学、一部政府関係機関な
 のも参加した。スバ（フジョー
 ー）に入港直後、豪雨の中で
 行われた歓迎のカバ儀式に始ま
 り、ホニアラ（ワロモン諸島国）
 首邇で夜、行われたレセアシヨ
 ースの重みカレリーの幸さ、醗酒
 のたまさなど、いずれも熱められ
 られている。一方、メラネシア系
 住民は、本来のお人よしに加え
 て「ゆつり急う」という将隊
 来計画を立派に持ち合わせてい
 る。したがっていつけん両者はう
 ま調和を保っている。

ンで締めくくった陸士での全行程は、これらの協力によつて成功のうちに幕となった。

フィジーは一九七〇年に独立し、インド系五一割、メラネシア系四五割の人員構成である。一方

ソロモン諸島國では国民として
のアイデンティティ（同一性）が
薄いと言われているが、八十以上
の言語や部族の違いに由来して閉
鎖性が強い。土地、植物、それに
たる果実、それぞれに持ち主が違

今回の調査は、第1次調査に引き続きフィジーに根拠をもつ南太平洋大学との共同企画であり、ソロモン諸島国においてもその支部が加わった。調査の交渉は前年の経験を生かして順調に進行した。

ソロモン諸島國は一九七八年に獨立し、メラネシア系九三割といへ、多數の系列氏族の集團である。したがって独立後の社会の歩みには類似的動向があると同時に微妙な相違がみられる。このよう

に異なった背景をもつ二つの國をアジアをはじめとして次第に困難を並行して調査するのは、それなりさが増してきた。それは民族意識の高揚にもよるが、資源採取を極に面白みがあるが、同時に困難さ

度に警戒するところが原因の一端ともなっている。しかし一方では技術援助は経済を繁栄させ、子孫に豊かな生活水準を維持するために不可欠という多くの政府の考えに支えられている国が一つのこと事実である。したがってわれわれの学術調査はのびのびの呼吸を可能な限り確実に変化しつつある。たとえばファイジーではインド系住民による消化したまで行われねばならぬ

吾國から歡迎されてゐる面が多分
 にあるといふことができよう。し
 かしわれわれは現時点でのこのよ
 うな好ましい状態に甘んじること
 なく、今後とも調査國との間で知
 識と人間の交流とを謙虚な気持ち
 で持続していくように努力すべき
 であらう。(調査隊長・片山忠孝)



てのサトウキビの栽培が行われていたが、最近ラノエ系住民によつて、行われるようになった。兩種庶民の社會・經濟の關係が變化するのは當然であるが、土地所有關係や伝統的共同社會、單純な生活概念をもつ自給自足意識にも變化の兆しがみえ始めた。一方ソロモン諸國では、長い間に行れてゐた燐火煙燻祭を意味して、本来伝統的自給生活概念を意味してゐたサブシメン方式が、一部では生産物を市場に出荷するといつて根本的變革がみられる。

(南日本新聞1983年1月26日)(5)

南太平洋自然と人

フィジー・ソロモン学術調査隊報告

②

オセアニア、それは広大な海洋とその間に点在する島よりから成る。島しょに住む人々にとって、海は交通、漁撈(ろう)など生活の場であり、また若人の冒険心をかきたて、数々の物語を生んだ場でもあった。オセアニアの自然、民族、産業を語る時、海との関係

自然班

ついで、海水の流れは主に表層の暖かい海水が東西方向に流れ、南向き、東向き、数本の流れがあり、赤道海流系と呼ばれる。暖かい海水が表層を流っているため、下層にある海の栄養分は表層に運ばれず、熱帯の海を陸地にたとえれば、砂漠の状態に近い。熱帯の海で、肥えた耕作地に相当する生物生産性の高いところは、島しょ沿岸域や、海流の境界域など、限定された海域である。

赤道海流の変化は熱帯の海自身の変化であり、それは当然島しょ沿岸域にも影響を及ぼす。島しょに設置された潮位計の記録には、沖合の海流の強弱を反映する水位が記録される。赤道海流系の勢力の強弱、位置、変化の状態を知ることは、オセアニアの自然環境を知る基本でもある。

自然班は調査期間中の赤道海流の状態を把握するため、ソロモン

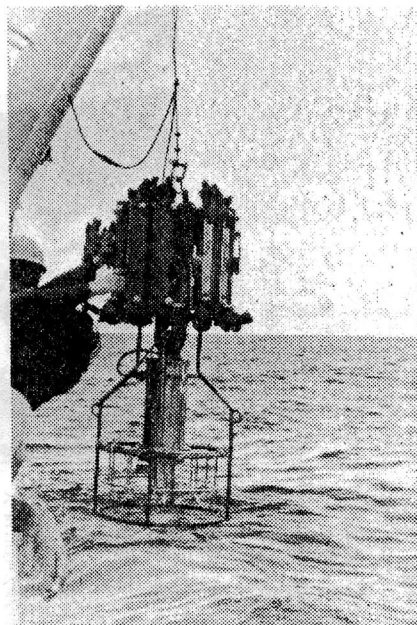
生体輸送の難しさ痛感

力により、スバの沖合五キロの海域でオウムガイ十三個体を捕獲した。六個体を解剖し組織学的試料を作成、七個体を船内の飼育水槽に入れ輸送を試みたが十五日目に死に、生体輸送の難さを痛感させられる。サンゴ礁の動物として、腔(くう)腸動物、棘(きょ)皮動物の分布調査、標本採取が行われた。

自然班だ一人の陸上部門を担当した中野和敬(鹿大・南海研)は、ガダルカナル島を中心にソロモンにおける焼き畑体系の調査、耕作放棄地における植生の回復と環境要因との関係を調査した。

自然班の調査は、沖合の海洋、島しょを囲む沿岸水の状態、そこに棲(せい)息する動物、植物、そして陸上の植物と、一連の部門を担当した。ここに調査活動の一端を紹介した。南海の空の下、強い日差しやスコールにあいながら苦勞したところ、研究成果がまとまる、または楽しい思い出に変わっているところだ。

(茶田正明・鹿児島大学水産学部助教)



赤道付近での洋上で「かごしま丸」を止めCTD(水温塩分連続測定機)を入れる

南太平洋自然と人

フィジー・ソロモン学術調査隊報告

イモ食から米食へ移行

いる。このインド系民の主食となる米を自給するために、水田造成が進められ、フジヤ、桑の住民の米の消費はかなり少ないとみてゐるのである。

ところが、ソロモン、の出水地域を調査してみると、多量の米が国内で消費され、イモ類を主食として、かつて米食の習慣の全くなかったこれらの島々が米に飽へるようになった。今後の移住が徐々に盛んであることがわかった。また住民に問いてもイモより米食の方がうまいといふ。

すると食糧(米)の自給は、ますますすかしくなるだろう。また、両国の人口増加率はかなり高く、人口圧が徐々に増大して、米不足にいつその拍車をかけることになる。今後、日本に対する水稲関係の技術援助の要請はますます強まるだろう。そして、両国との間に共同研究を進めている鹿児島大学、南海研センターにもいろいろな要請がくることも考えられる。

今回調査したフジ、ソロモン、はいずれも農業国で、われわれ

る。しかし、調査期間はおもひにも短く、調査内容は、現地を見る、現地で聞く、現地へ研究材料を採取するといった具合に、分刻みて飛び回るといった感じにはなするをえない。具体的には、まず関連の試験場や農林事務所等で現状説明を受ける。つぎに、現地の関係者とともに現地にいき、意見交換をもち同時に土壌の作物などを採取するのである。このように

ながら時間配分し、すべてにこなせようがない。このロスのないスケジュールのなかで、追いまわされるのが熱帯作物学の角隊長と豪農生の江口、遠城岡隊員の若手である。彼らは、現場に着くと採取用車をかきえ自動車から飛び出し、調査地域対象作物の生育などを写真に収めるのち、土壌や植物を採取する。そして、途中の車上では常にカンをこかまえ、目の新しい光景に出会ってシャッターを押して記録するといった具合で、ほとんどむだ口もたげな

い。そのうえ採取品の整理が夜まで続く。

採取品の整理が最も遅くまで続いたのが害虫学の樋下町職員だった。彼はつねに昆虫採集用のネットを持ち歩くので、自己紹介は名前だけで十分だった。ネットを持

れもが親しみを感ぜるらしく、現地住民が彼の周囲に集まり、そして昆虫採集を手伝ったりしてくれ
る。停泊中の「かごしま丸」の電
灯は、誘蛾（カ）灯となるし、ま
た現地でも日本から持っていっ

南太平洋地域の人々は、サトイモ、ヤマイモ、キャッサバ、サツマイモなどのイモ類を主食としていた。ところが今回調査したフィジー、ソロモンのどちらにも新しく開発された大型の水田が生まれ、フィジーの場合、過去に荷葉田の労働者として移住してきたインド人の子孫が、いまや全人口の半数以上を占めるに至って

食糧の自給自足を自ら農産園で起こっているの嗜好の板敷を、過去の日本におけるパン食の場とあつたかと単純に解釈し良いのであらうか。水稲を栽培する場の気候、土壌、病害虫の他の条件はイモ類の栽培条件よりも少々きびしく、水稲栽培に適してはと考えられる地域は、南国ともそれほど広くないようである。この嗜好の移行が限りなく進行

農畜班の共同研究のテーマを設定するにあたっては、相手側から新しい開発や作物栽培の技術的な要求がかなり強く出される。フィジールの場合、同国の経済的約七割が飼料変動の大きな砂糖に依存しているために、非常に不安定な飼料を求めている。政府は、輸出産物を多角化と食糧の自給を旨とした農業開発を成功させて、経済の安定を図っている。だから、この

して今回採取した主なものは、土壌中四点位、作物（イネ類）五十八点とである。今後、相手をを用いて種々の研究を進め、相手国の農業に貢献しうる結果を得たいと願つた次第である。

現地にはいるとまず一日の調査内容や時間配分などについて、よく細かく話し合いがカウワンターバーとの間でなされる。その主役は、海外調査のベテラン片山隆俊

ガダルカナル島の水田を視察する調査隊。手前はかんがい用の水路



のである。
 (林満・鹿児島大学農学部講師)

農學班

の作物の生産性の向上に関する事柄が研究テーマとして採用され、

見交換の主役でもあり、他の五人の隊員の調査状況を的確に把握し

(林満・鹿児島大学農学部講師)

南太平洋 自然と人

④

フィジー・ソロモン学術調査隊報告

第一印象であった。

「ソロモンの漁場面積は？」という漁業会社によって代表されて関係者に質問すると、「東西八百哩、南北五百哩」という返事が威勢よくかえってきた。それは、わが国の国鉄路線で表現すれば「東で鹿児島・東京間、また南北で西で鹿児島・大板間に匹敵する。もろろ、二百哩の経済水域を含めてのことであるが、それにしても広大な漁場面積である。

この疑問は、その漁獲量で漁業を中心として昭和四十八年に創業した水産会社である。本社はホニアラに所在するが、事業の大半はツラキとソロの両基地で行われている。従業員は、ソロモン人七百五十人と日本人二百五十人で構成されている。昭和五十六年の主な営業実績は、冷凍品四十八億円、缶詰七億円、荒節二億円、その他総計約六十億円である。カツオの出荷作業や、缶詰工場フル操業などで活気にあふれている。作業員はほとんどソロモン人であるが、幹部が日本人のせい、その基地内では日本人的な鬱鬱を感じた。しかし、かえり、その基地を離れると、ソロモン特有のゆったりとした風景が目につく、身も心も安まる。

釣り天国に漁業の息吹

ソロモンでの調査基地はガダルカナル島のホニアラ港である。その港に入港する際、私たちは海面に飛び交う魚群を何回となく目撃した。カツオの釣り餌を好適なタレントイワシの群れがもたない。大魚は引かれて海面へと浮上したのである。それにしても、すごい魚が多いな。それが私のソロモンに対することは、そうしたソロモン

水産班

産物は、原木やコブラヤシの白身と並んで同国の三大輸出品目に数えられている。なお、先代の同社総支配人であった本田寿夫氏は、キャプテンホンダとして地元民から熱烈に親しまれ、昭和五十六年に「同国で最も貢献した人物」としてソロモン政府からM.M.勲章が授与されている。それは同国初の最高位勲章のことである。私たち十六人の隊員は同社の好



漁をする人びと —ソロモン諸島ガダルカナル島で—

かえり、その基地を離れると、ソロモン特有のゆったりとした風景が目につく、身も心も安まる。ラから東へ二十哩ほど離れたところ、ワカムという小さな漁民の集落がある。彼らは大戦後、ソロモンに定住した。その習慣が大きく異なっている。ソロモンの人たちは、お互いに、そのような宿命を背負いながら生きていかなければならない。クムの漁民はマライタ島から移住後、なんの支援もなく、細々と漁業を行ってきた。そして今日、彼らは立派な漁船漁業事業を自力で営むように成長してきた。私たちは時間のたつのを忘れて、彼らの漁獲現場を見学した。たぐいましい若者の姿が印象的であった。その現場から二三百呎離れた道端に、村のよき市場があった。彼は漁獲物をその市場に水揚げした。市場は急にぎやかになった。私は衝動的にMサイズのカツオを購入した（二百六十五円）。彼らの漁業は自給自足の域を脱し、として、いる。若い漁民が育っているの、いすれソロモンの漁業にも若手の変革が起りそうである。それが水産班の共通した見方である。

（中田八郎・鹿児島大学水産学部教授）

南太平洋 自然と人

⑤

フィジー・ソロモン学術調査隊報告

陸上での調査が生命である社会文化班員にとって、四十二日の調査期間中三分の二を占める洋上生活は大変もたない、と思われよう。しかし不思議なことに、いつも船酔い気味の一人を除いて、班員は皆元気で意欲的に学習し、討論し合っていた（という）。

また、ひとたび陸上調査が始まると、各自の行動計画に従って、精力的に取り組んでいた。

激戦地の一つガダルカナル島北岸にあり、鉄底海峡に臨む港町でもある。人口一万五千人の町並みは赤黄、色とりどりの花咲き乱れる街路樹に埋められており、素足の人が行き交う様子はのどかさである。しかし車道には見慣れた日本製の車だけが自立し、時々人を満載したトラックが騒気に走りすいていく。公設の市場はまた、近郊からの人々でにぎわっている。タ

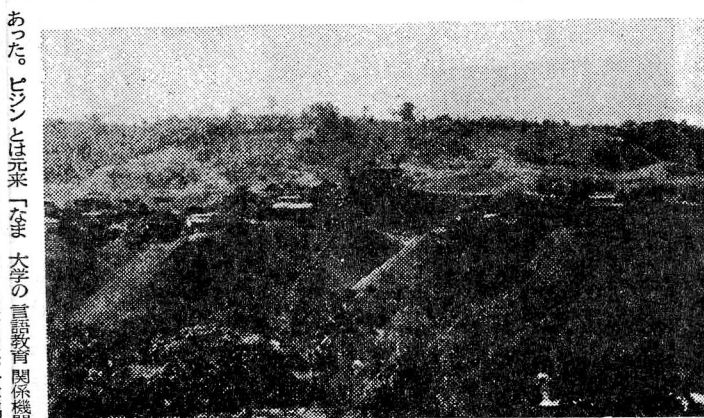
焼き畑・移動耕作の農民

ソロモン諸島滞在は日程の都合上、十二月六・九日というあつた代りのピーナツひと握り二十五百、葉つ葉一束五十円を付ったという値段で売られている。ピーナツ売りの店主は話に夢中になり、見ると裸の子供が巧妙に一個を失敬した。五円と離れない所でもう食べてしまった。

国民の大部分は農民である。原始的農と自給的農とが、簡単に言ってしまうことが多いが、貨幣経済の普及とともに変化は大きく、食糧の大部分は農民である。原始的農とは自給的農とが、簡単に言ってしまうことが多いが、貨幣経済の普及とともに変化は大きく、食糧の大部分は農民である。

社会文化班

今回は国立民族博物館から和田



ソロモン諸島の首都ホニアラの風景。下は市街地の街路樹で丘の中腹に住宅が陣どる。後方になだらかにのびるのは焼き畑

あつた。トシとは元来「なま」の意識だが、ソロモン諸島、省、各種新聞社、放送局、小学校、バプティストキヤ等では土着化の現場を訪ね、国語教育資料、放

祐一、杉田繁治の両隊員が参加した英語をシンシグリス語に訳したが、テーマはマラネシアにおけるヒジンの実体と資料の収集に伴う言語の生態を調査するため、

送資料および録音をとることができた。今後コンピュータを駆使しての解明が待たれる。

上村俊雄隊員は前回に続いての参加である。国語博物館では特別に収納保管庫を開いてもらい、考古学的資料の計測や写真撮影を行った。また文献に知られる遺跡の見学、遺物の採集を行った。フィジーでは見学途中、未報告の新しい遺跡と思われるものを発見、土器を採集する幸運に恵まれた。両国には考古学専門家がおらず、上村隊員の今後の研究が待たれる。

松田恵明、片岡千尋、鈴木隆史の三隊員は水産社会学的な課題に取り組んだ。二百四時代を迎えて、南太平洋諸国に共通した問題点として、食糧供給、雇用の拡大、外貨獲得、モノカルチャー経済からの脱皮など難問をかかえているが、これらの突破として注目を集めているのが水産業である。両国には日本資本のかつお合弁事業があり、この事業体の経営その他の分析を中心に問題の解明にあたる。

（石村満宏・鹿児島大学法文学部助教）

南太平洋 自然と人

フィジー・ソロモン学術調査隊報告

⑥

ソロモンの健康状況については、調査員が首都ホニアラに属したるので全国的なことはわからない。ホニアラでは保健省次官のマニラ氏、医師のデキエル氏に会い、外人コンサルタントのパーカー博士を助けて話し合いを持った。この調査の目的を説明し協力方をお願いしたところ、快

く受け入れてもらった。今回は二日間しか滞在しなかったが、今後の調査で保健調査についても便宜を図るとのこと、将来の調査に明るい見通しを持つことができた。ソロモンの医療状況を簡単に述べてみる。

同国の人口は約二十万人と、属児島市の半分に満たない。ここに政府立病院六、数病棟がある。診療所は地方五十六カ所、

外は医師が不在であることが日本など異なる。公的医療機関は十四時間オープンしており、医療費も原則として外来入院とも無料である。この制度でカバーされている国民は七五割以上にもわたる。教会系、事業所系のもは有ったこと、こういふ俗称ができたのであろう。しかし病院を訪問した外米ではほとんど重症をみることはなかった。

同国で大きな問題とされる疾病は、医師はすべて外国で医学教育を受けてきたエリートである。また白人のコンサルタントが国立中央病院に数人いて診療、臨床検査に当たっている。一定の水準を維持しているものと思われる。

ここで面白いのは、中央病院がない。NOと呼はれることである。NOとはすばらしい、すぐれていふことを意味する。またNOと

は、このことはいわゆる成病、存存しないといふこと、ソロモンではまた医療施設や従事者が不足していることから検診等にもサービスが提供されていないこと、起

マラリアに3万5000人(1980年)

は、このことはいわゆる成病、存存しないといふこと、ソロモンではまた医療施設や従事者が不足していることから検診等にもサービスが提供されていないこと、起

同国が熱帯地方にあり、マラリアが多い、即危険だと考を防禦をのまなければ、とするのは少早

生していない。これは日本の個人衛生のレベルの高さを示すものである。予防薬の長期服用は副作用による障害をひき起し、かえってマラリアよりも恐ろしいのではないかと私は思える。

他に熱帯の病気に多いものをあげると寄生虫、とくに十二指腸虫症である。またメーバ赤痢、細菌性赤痢、腸チフスも報告されている。ウイルス疾患はデング熱、伝染性肝炎、狂犬病なども存在する。注意を要する。

ホニアラでの医学班の行動は、衛生概況の把握や文献収集を中心として、ガンの研究のための血液サンプル収集、口腔(口)疾患の診察がなされた。また人々の生活と動物とのかわり合いを知るために市場などで牛の捕獲や、海では毒性物質をもつウニの採取を行った。これらの調査物件の解析は今後明らかにされる予定である。

(柳橋次雄・鹿児島大学医学部助教授)

〓おわり〓



ソロモン諸島保健省の高官と情報交換する医療班員
＝首都ホニアラの保健省会議室で＝

フィジー・ソロモンでの調査から

和田祐一（社会・文化班）

今回の調査で得た収穫の一つは、フィジーとソロモンにおける5母音英語の確認である。たいていの言語は、音声言語として『機能』するために必要な母音（音素）の数がきまっている。たとえば日本語の母音音素は5つである。『たいていの言語』といったのは、英語の音素の数は学者の説によって多少ちがうからであるが、しかし、最低の数を出している学説でも6母音以下にはならない。つまり、〈アイウエオ〉のほかにもう一つの母音音素があれば英語として機能するというのである。この6番目の母音というのは〈e〉のさかさま〔ə〕で、これができないと区別できない単語が英語にはたくさんある。（例：heart/hurt = haʔt/həʔt）この第6の母音は5母音体系のなかではどう処理されているか。こんなことは、考えるまでもなく、5母音のなかのどれかで置きかえられるにきまっている。理論的にはそう解っていても、実状をみるまではやはり不安なのである。しかし、メラネシアも日本と同様であった。今、5母音型の英語を話している人々は、世界中に分布し、その数は増加の一途をたどっている。少なくとも英語を母語とする地域以外では、5母音英語の人口は6母音英語の人口を上まわっているにちがいない。世界の言語の中には5母音体系の言語の数は一番多く、6母音の言語の数はずっと少ないのだ。7母音以上・4母音以下の言語はもっと少ない。そうすると英語は他民族に使用されればされるほど『5母音化』する。加うるに、ローマ字そのものが5母音体系である以上、国際英語（non-native English）の五母音化は避けられぬ運命にあり、5母音英語がすでに広く機能しはじめている。

赤道祭をおえて

鱒坂哲朗（自然班）

筆者は、出発直前に「赤道祭実行委員長」を副隊長より拝命致しました。第一次隊では寺田・須藤両隊員の活躍で成功しているだけに内心懸念していましたが、医学班に鹿大でも稀な(?)人材がそろっていたことは心強いことでした。乗船後、各班の実行委員が集まり基本案の作製にかかりましたが、いかに今回の調査の特色を出すかという点に赤道祭の成否がかかっておりなかなか案がまとまりません。結局、筆なれた木原隊員に基本案を出していただき鈴木隊員がそれに手を加えて完成しました。細部に関しては各出演者のアドリブにまかせることとなりました。

赤道祭の準備は意外な人が奇抜な迷案を出したり舞台装置等の工作に腕をふるったりして、長い船旅の疲れも吹きとびます。念入りの化粧や衣装合わせが始まる頃にはしだいに熱をおびて来ます。女性用下着に身を包みアイシャドーを濃く塗りつけた自分自身の姿を鏡で見て初めはびっくりしていますが、やがて妖しげな魅力に自己陶醉する人が続出し、赤道祭の本番にも増して興味のある光景でした。

天の岩戸に隠れた天照神（伊藤隊員）がさまざまな趣向で誘い出され、最後に船長に赤道通過の鍵を渡すという寸劇を、終始軽妙な平田隊員の司会で無事演じられました。しかし、圧巻は珍妙な衣装の医者（船医）と実物以上の看護婦（寺師隊員）の長時間にわたるアドリブで呆るとともに抱腹絶倒しました。出演者の皆様や道具・衣装など陰の力となっていたの方々に感謝いたします。

未知の国・隣の国 フィジー・ソロモン諸島 仁平 将（医学班）

未知の国へ調査に行くことができる、しかも往復とも船で。——学生時代の一時期、船医になって海外へ行ってみたいと考えていたことをふと思い出した。しかし、かごしま丸の1280トンという大きさは想像すらできない。青函連絡船は6000トン級ということはわかっているも……。

船の揺れや船酔いの事などは私は全く心配はしていなかったが、周囲の人達の方が心配をしてくれていたようだ。幸いにも航海中は天候に恵まれ、ベッドにしがみついたのは出航の日だけだった。

普段は接する機会の少ない他の専門分野の人々と寝起きを共にしたことは非常に有意義であった。洋上学部の中では特に「増殖」「焼き畑」「言語」などの話を興味深く聞いた。また、船員の人達とも交流が出来て楽しかった。しかし今になって考えると、もっと話を聞いたり意見を交換しておきたかった人が多数いるような気がする。

途中で他の国へ寄らなかったせいか、フィジーとソロモン諸島はあたかも隣の国のような気がした。

家族にはおみやげらしい物を買ってこれなかったが、日焼けした元気な姿で帰った事が何よりのおみやげであろう。

無事に調査を終えて、医学班公衆衛生グループをはじめとした隊員、乗組員の人々のお力に感謝します。

調査に参加して

江ロー弘（農業班）

かごしま丸が2号用地の港に着岸してからはや2ヶ月近くが過ぎようとしています。洋上では考えられなかったような速さで日々がすぎ、アッという間に仕事が累積して、今ではほとんど首が回らぬ状態です。『ラジオ体操15分前』で始まった洋上での1日が最近とみに懐かしく思われてなりません。この原稿を書こうと思い記憶を逆のぼって行くうちに変な事に気づきました。もっとも調査期間中にはごく自然な事として受けとめていたのですが、フィジーでの調査期間中、農業班は距離的にも時間的にも最も広範に渡って行動したにもかかわらず、フィジー本来の原住民であるフィジー人とほとんど接しておらず、彼らの話がほとんど聞けなかったということです。実際、インド人の運転する車に乗り、インド人のカウンターパートの案内でインド人の耕作地の土壌を採取し、またインド人の耕作者から話を聞く。多少オーバーですが何となくインド人の生活圏だけを走りまわって来たような気がします。帰路の洋上学部で、日雇いのフィジー人が働いているのは見たが、自分の畑に出て働いているフィジー人を見た事がないと言いましたがひょっとするとフィジー人が働いているような場所や時間帯に行かなかったかもしれません。『うちの畑は…』というようなフィジー人の話が聞きたかったと今ごろになって思います。最後にこう機会を与えてくださった先生方や関係者の皆様に感謝いたします。

フィールドワークの現場で

川口智治（水産班）

今回、大学院生という身分ながらオセアニア海域における水陸総合学術調査に参加させていただきました。私にとって初めての海外渡航だったので見るもの聞くものがすべて生涯忘れ得ぬ良き思い出となりました。

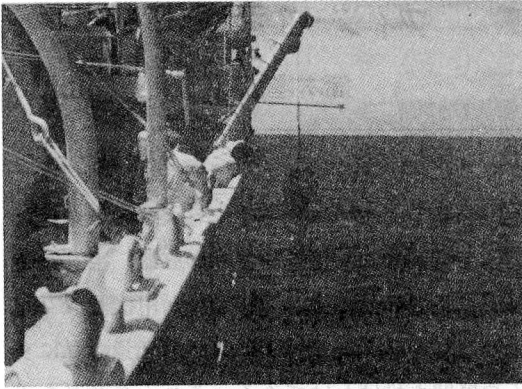
新造2年目のかごしま丸での洋上生活は快適そのものでした。調査日課である海洋観測と帰路の東経160°線上の定点観測も無事におえることができ、なによりでした。

また、陸上調査のなかでもフィジーのシジミ貝 (*Batissa violacea*) の生態調査のことが最も印象に残っています。その調査の舞台は、フィジー最大のレワ川でした。ボートで海から河口を臨んだ時に見た河口域一帯が川からの土砂で黄土色をしている光景は、今も目に焼き付いています。また、川が雨で増水しており、どの現地の人に聞いても「今日は採れない」という日がありました。採集調査を半ばあきらめていた時、万が一と思ってインド系の女性に尋ねてみました。「この貝はどんな所に住んでいますか」と貝殻の実物を示したところ、なんと快く説明してくれました。実物を示したのが何より功を奏したようです。この調査をおえて痛感したことは、フィールドにおいては、実験室とは違い予期せぬ突発的な事象にいかに対応するかという実験室では到底考えられない磨き抜かれた判断力、洞察力、勇気等が非常に大切であるという事です。そういう点で大変勉強になりました。「今後も後輩にこのような機会を与えてくださるようお願い致します。」

フィジーで考えたこと

鈴木隆史（社会・文化班）

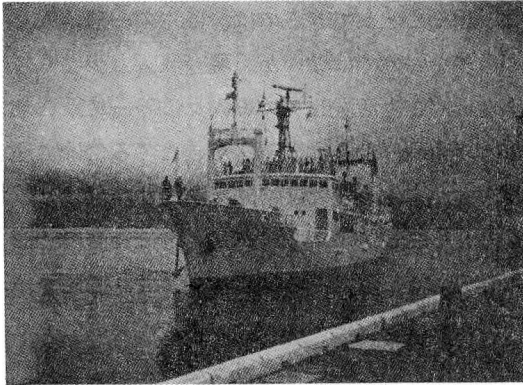
フィジーの首都スバにおいて私は、押し寄せる「商品」の波の中で呻吟する人々の姿を見たような気がする。色とりどりの衣服、宝石、時計、電気製品、カメラ、自動車が氾濫し人々を圧倒している。一見豊かに見える光景も私に多くの疑問を投げかけてくる。これらの商品を手に入れることができるのは、ほんの一部の人々に過ぎないのではないか。現金収入も少なく自給自足的な生活をしている人々にとって、これらの「商品」は単に欲望をかきたてるだけでそれを満たすこともできず、気をイライラさせるものとしてしか映らないだろう。これらの「商品」が氾濫し、人々の欲求は満たされずイライラがうっ積していくことが、果して発展といえるのだろうか。少しでも自分達の生活を改善したいと願う人々にとって、高級なカメラや電気製品は無関係な「商品」である。ショーウィンドーのガラスに額を当てて中の陳列品を眺め入る人々の心の中までは見ることはできないが、開発が進みさらに多くの「商品」が村々に流れ込み人々を圧倒していくにつれ、人々の生活も変わっていくことだろう。開発によって人々の生活が豊かになることを否定し、現在の生活の方がずっと素晴らしいことだと言うのは、「商品」のあふれる中で日々の生活を送っている我々のエゴイズムでしかない。ただ、このフィジーの人々の心が開発とともにどのように変わりつつあるのか、本当の豊かさとは何か、移り変わりつつある社会の中でこれから考えていきたいと思っている。



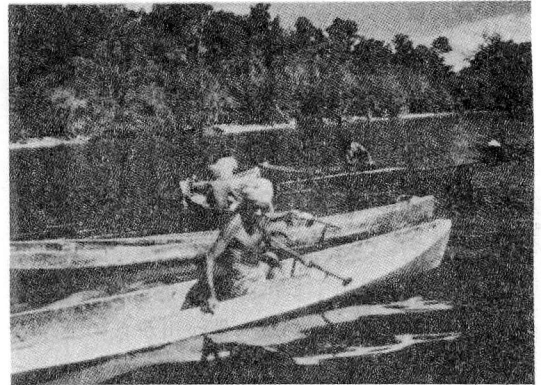
海上観測



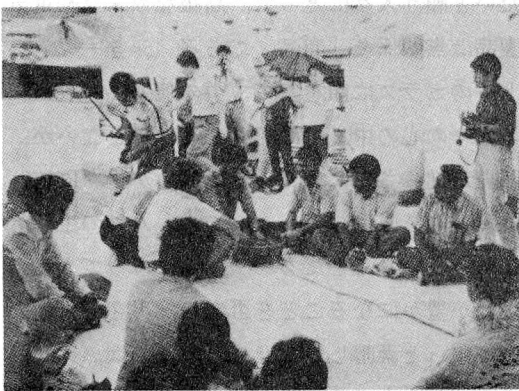
稲作調査



かごしま丸スパ入港



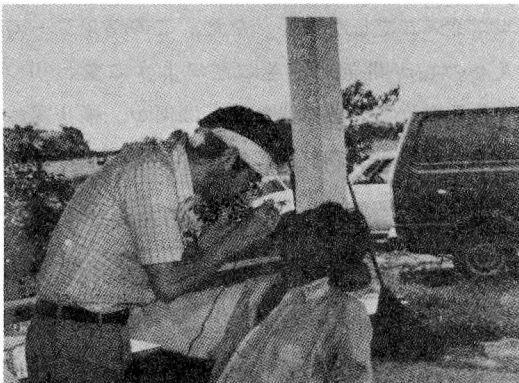
ソロモンの伝統的漁法



USP, 歓迎式



かごしま丸レセプション



口腔疾患調査



調査隊員

昭和57年度 特定研究「オセアニア海域における水陸総合学術調査」
(フィジー及びソロモン) 調査隊員名簿

代表者・総括		岩 切 成 郎	鹿児島大学南方海域研究センター長
			鹿児島大学水産学部・教授・国際海洋政策学
隊 長		片 山 忠 夫	鹿児島大学農学部・教授・作物学
自然班	隊 員	武 石 泰 亮	鹿児島大学工学部・教授・電子計測工学
	事務局 長	中 野 和 敬	鹿児島大学南方海域研究センター・教授・生態学
	班 長	茶 円 正 明	鹿児島大学水産学部・助教授・環境物理学
	隊 員	榎 本 幸 人	神戸大学理学部附属臨海実験所・助教授・海藻学
	"	塚 原 潤 三	鹿児島大学理学部・助教授・細胞生物学
	"	鯉 坂 哲 朗	京都大学農学部・助手・水産植物学
	"	小 野 修 助	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員
	船長・隊員	植 田 総 一	鹿児島大学かごしま丸・教授・船長
	隊 員	東 川 勢 二	鹿児島大学かごしま丸・助教授・一等航海士
	"	西 徹	鹿児島大学かごしま丸・講師・二等航海士
	"	益 満 侃	鹿児島大学かごしま丸・助手・次席三等航海士
	"	山 口 照 男	鹿児島大学かごしま丸・講師・機関長
	"	堀 脇 秋 男	鹿児島大学かごしま丸・技官・一等機関士
	"	中 釜 勤	鹿児島大学かごしま丸・技官・二等機関士
	"	田 中 久 雄	鹿児島大学かごしま丸・技官・三等機関士
	"	吉 満 幸 雄	鹿児島大学かごしま丸・技官・通信長
	"	帖 地 純 隆	鹿児島大学かごしま丸・技官・通信士
	"	東 政 能	鹿児島大学かごしま丸・事務官・事務長
農業班	隊長・班長	片 山 忠 夫	鹿児島大学農学部・教授・作物学
	隊 員	林 満	鹿児島大学農学部・講師・熱帯作物学
	"	榊下町 鉦 敏	鹿児島大学農学部・助手・害虫学
	"	角 明 夫	鹿児島大学農学部・助手・熱帯作物学
	"	江 口 一 弘	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員
	"	遠 城 道 雄	"
水産班	隊 員	米 盛 亨	鹿児島大学水産学部・教授・漁法学
	副隊員・班長	平 田 八 郎	鹿児島大学水産学部・教授・増殖生理学
	隊員・事務局	井 上 晃 男	鹿児島大学南方海域研究センター・教授・海洋生態学
	隊 員	坂 東 敏 博	鹿児島大学水産学部・助手・漁法学
	"	池 田 文 厚	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員
	"	岸 岡 正 信	"
	"	小 川 満 也	"
	"	川 口 智 治	"

社会・文化班	隊 員	伊 藤 行	鹿児島大学工学部・教授・建築史及び意匠
	"	和 田 祐 一	国立民族学博物館・教授・言語人類学
	"	上 村 俊 雄	鹿児島大学法文学部・助教授・考古学
	"	杉 田 繁 治	国立民族学博物館・助教授・コンピュータ民族学
	班 長	松 田 恵 明	鹿児島大学水産学部・助教授・国際海洋政策学
	隊 員	石 村 満 宏	鹿児島大学法文学部・助教授・人文地理学
	"	片 岡 千賀之	鹿児島大学水産学部・助教授・水産経営経済学
	"	鈴 木 隆 史	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員
医 学 班	船医・事務局	寺 師 慎 一	鹿児島大学南方海域研究センター・教授・人体病理学
	班 長	榎 橋 次 雄	鹿児島大学医学部・助教授・公衆衛生学
	隊 員	仁 平 将	弘前大学医学部・講師・衛生学
	"	木 原 大	鹿児島大学医学部・講師・生理学
	"	泊 惇	鹿児島大学医学部・助手・公衆衛生学
	"	松 元 正	鹿児島大学医学部腫瘍研・助手・腫瘍学
	"	内 川 隆 一	鹿児島大学医学部・助手・寄生虫学
	"	仙 波 伊知郎	鹿児島大学歯学部・助手・口腔病理学
	"	坂 本 峰 至	鹿児島大学南方海域研究センター・教務補佐員
事 務	資金前渡官吏	有 村 正 男	鹿児島大学南方海域研究センター・事務室主任
そ の 他	留 学 生	Nand RAM	鹿児島大学水産学部・研究生・漁法学
	"	Jai Raj PRASAD	鹿児島大学水産学部・研究生・漁法学

センター研究会・活動報告

本年1月からの南海研センターの定例研究会活動は以下の通り。

第13回（昭和58年1月24日）

「フィリピン人のシャーマニズム—平地フィリピン人の宗教世界」 寺田勇文氏（南海研）

第14回（昭和58年2月23日）

シンポジウム『パプア・ニューギニアの生活と栄養』

「パプア・ニューギニアを舞台としたサブシ

ステンス研究」 中野和敬氏（南海研）

「パプア・ニューギニア低地における個体群生態学的研究」 大塚柳太郎氏（東京大学医学部）

「パプア・ニューギニア高地の生活と栄養」 小石秀夫氏（大阪市立大学生活科学部）

第14回の研究発表要旨は次号に掲載の予定。

東部ジャワの水産事情

片岡千賀之（水産）

1981年の6月から8月にかけて、東部ジャワを中心に水産業調査を行った。

その特徴は、第1に自然的、地理的条件の違いによる地域特性が明瞭なことである。東部ジャワの漁業は、海面漁業はインド洋岸は未発達で、バリ海峡やジャワ海が中心となっているし養殖業では西部ジャワが淡水養殖（主にコイ）、東部ジャワの汽水養殖（主にミルクフィッシュ）という伝統的な立地配置が今尚明白である。

第2に、経済発展の地域差が水産業に反映しており、東部ジャワの中でも、社会経済の中心地およびその周辺部では、水産業は発達し、生産性が高い。マドウラ島などの辺地では、伝統的、粗放的漁業・養殖業が多い。ジャワ島には伝統的なパヤン（船曳網）漁業からまき網漁業への転換が進んでおり、養殖業も構造池に種苗放流、施肥を行うなどの集約化が進んでいる。しかし、マドウラ島や辺地にはまき網の普及は遅れており、養殖業も塩田裏作、水田養魚、自然の成り行きにまかせた粗放的な養殖が主流を占める。至極当然な現象も全国平準化した日本の水産業になれた者には新鮮な驚きである。

第3に、同一地域において多様な漁業が混在していることが特徴である。大規模なパヤン・まき網漁業とならんで一人で行える採貝、投網すくい網、各種トラップが盛んに行われているし、養殖業も種々な段階のものが併存する。漁業・養殖生産ばかりでなく水産物の流通・加工・消費でも同様である。よく見受けられるのは道端や広場で婦女子が自家漁獲物や簡単な加工を施した魚を少量ずつ持ち込んで販売し、その販売代金で農産物などを購入するものである。規模の大きな漁港では、漁業と加工・販売が分画し、建物の中でセリによる価格決定、氷やト

ラックを使用しての出荷が行われるが、そこでも魚を漁船から直接一籠購入し、周辺集落に売る婦人やタダで魚を無心する子供で水揚場は混雑している。

水産業の多様性にみあって漁業者の存在も多様である。基本的には、漁船漁具あるいは土地（農地や池）の所有者、小漁家、漁業労働者家族に分類されるし、漁業規模・生産性に応じた生産関係、漁獲物配分方式がとられる傾向がみられ、漁業所得の階層差も明瞭である。だが、これらのことは水産業の多様性に照応しているというだけで、多様性の原因を説明するものではない。多様性をもたらしめているのは農漁村の過剰人口であろう。

一般に農漁家は家族数が多い。婦人や子供を総動員してやっと家計を維持しており、家計収入の源泉は少額多種にわたる。性別・年齢に応じてわづかな資金で着手しえる零細漁業が常に再生産されてくる。それらが大規模漁業によって駆逐されないのは、大規模漁業とはいっても季節的生産であり、かつ一統あたりの従業者数が過大で、労働生産性は見かけほど高くないためである。

インドネシアの水産業は、漁船の動力化、組織網の普及、能率的漁法・集約的養魚法の導入等によって発展しているが、漁業の近代化は伝統的漁業と並存し、伝統的漁業を生みだす社会構造によって変容されながら進展しているといえることができる。

インドネシア調査報告は、最近「Ecological Biology and the Promotion of Tropical Primary Industry」として出版された。

人骨製の道具：オセアニアの事例

小片丘彦（歯）

頭蓋など人骨を加工して儀礼用の楽器や飲器を作ったり、道具、装身具、武器を作るいわゆる「人骨文化」の事例は、オセアニアにおいてはかなり普遍的である。ここでは筆者の経験した2例について報告する。

1. マリアナ諸島ロタ島古人骨の人工損傷

高山純氏らの2次にわたる考古学的調査(1970～71)の際、ほぼ12～13世紀の古チャモロのものといわれる約30体の人骨が出土したが、その中に左大腿骨の骨体が故意に切り取られている1例があった。つまり、残された上・下両骨端と、共に出土した骨体片には①骨体の全周にわたって傷をつけた後に骨体を折り取ったと思われる傷、②われわれがナイフで厚紙を裁断する時、予定の線に沿って何度も繰り返して刃を引くのと同様の傷、③ナイフで厚紙を裁つ際、ナイフの刃を引くかわりに連続して刃をノミのように突き立てるのと同様の傷、などの痕跡が見られたのである。マリアナ諸島にはサイパン島のアステオ洞採集の右脛骨を用いた槍頭(FRITZ 1904)など以前から人骨製骨器の存在が知られており、高山氏の当調査でも明らかにヒトの大腿骨や脛骨製の槍先が出土しているので、上述の人工損傷は、骨器を作る目的で大腿骨や骨体を切り出し、さらに長方形の骨片を切り取る、という一連の作業を想定することによって無理なく説明できるように思われる。

2. ソロモン諸島レンネル島の人骨製骨器

1973～75年に2回行なわれた慶応義塾大学の考古学・民族学調査(文部省科研費・海外学術調査)に同行してレンネル島に渡った際入手した民族標本の中に骨製の槍先・突錐・刺針や骨鏃があった。これらはすでに人骨製品として紹介されている(BIRKET-SMITH, 1956)が、実見し

たところ、いずれも研磨されていて自然の骨表面を残していないため、人骨かどうか、人骨ならばどの部位か、を肉眼的に判定することは困難である。そこで突錐と骨鏃の一部を検体として採り、血清学的に人獣判定を行った結果、人骨であることが確かめられた。また突錐・刺針の素材である長さ20センチ、幅13ミリ、厚さ10ミリの緻密質は骨のどこからでも得られるものではなく、大腿骨や脛骨の、きわめて限られた部位以外には不可能であり、それもかなり体格のよい人のものでなければならぬことが分かった。島民の中には実際に人骨を加工して骨器を作った経験のある老人がおり、次のように語ってくれた。採取した骨はまず大まかな切り出しをする。骨端を取り除いて骨体だけにし、次いで骨体を4本くらいに縦割りにする。道具は鉄斧や貝斧を使う。仕上げは海辺で水をつけながら海石で磨き、さらに先端を研ぐ。

さきに述べたロタ島の例でも、まず骨端を除き、次いで骨体を縦割りにする過程が推測されたが、レンネル島でもまったく同様の工程であることが分かった。またハワイ諸島オアフ島モーカブから出土した人骨中には、大腿骨や脛骨の骨体が釣針などに利用され、骨端の残った例が多数報告されている(SNOW, 1974)。

互いに遠く隔てられたミクロネシア、メラネシア、ポリネシアの各地でそれぞれ人骨製の道具を作り、その工程もまったく同じであるという事実はまことに興味深い。これは同じ素材同じ目的という共通性から必然的に生じたものかも知れないし、また、この風習と手法とを共有した人びとがオセアニアの各地に拡散してまだ日が浅いことを物語っているのかも知れない。

フィリピンのシャーマニズム —平地フィリピン人の宗教世界—

寺田勇文（南海研）

シャーマン (shaman) とは「通常、トランス（神がかり）のような異常心理状態において、超自然的存在と直接に接触・交流し、この過程で予言、託宣、卜占、治病行為などの役割をはたす人物」のことで、シャーマンを中心とした宗教現象・形態・複合をシャーマニズム (shamanism) という。シャーマニズムはシベリアの諸民族にのみ限定された現象ではなく世界各地で観察される宗教文化であるが、その様態には地域的バリエーションがみられる。本発表ではカトリック信徒が大多数を占める平地フィリピン人社会におけるシャーマニズムの様態について現地調査（1980年10月～81年9月、ラグーナ州農村部にて）で得た資料をもとに報告した。

事例としてとりあげたのはカトリック教会からは相対的に独立して活動する宗教集団（サマハン, Religious Samahan, 正式名称は Samahan ng Pinag-Kaisahan Sambahayan sa Bandalang Bundok）である。サマハンは毎週、「治療所」（gamutan）と呼ばれる独自の小礼拝堂で会合を持つが、その際には指導者のひとりである女性が主として聖母マリア、幼きイエズス (Sto. Niño) の「霊を宿し」トランス状態にはいる。その過程でメンバーに対してカトリック信徒としての生活倫理、カトリックの年中行事や聖句の解釈と意味づけ、サマハンの活動方針などを提示する他、個人を対象としたカウンセリング行為、各種の祝福、洗礼、聖体拝領を執行し、また癒し行為をおこなう。さらに大多数が農民であるメンバーに対して稲を植える時期と方法、薬用植物の使い方などについても教示する。指導者が憑霊状態にはいる時には聖なる霊を呼びよせる歌がうたわれるが、とくに幼きイエズスの霊に対しては各種の特別の歌と踊りを含む一連の儀礼が観

察される。シャーマン自身はこのような憑依を神から与えられた使命であると理解し、自分は「道具」（kasangkapan, ある目的のために用いられる存在）であると自覚している。

サマハンの活動の中心は以上のようなシャーマンを軸とした超自然的存在（聖母マリア、幼きイエズス、父なる神、諸聖人の霊）とメンバーとの間で成立する「直接的なコミュニケーション」にある。崇敬の形態はカトリック教会の公式のミサやロザリオの祈りに類似しているが、より土着的・神秘的な様相を呈している。そしてシャーマニズムの様態はカトリシズムの枠内で現出しているようにみえるが、その骨格においてはカトリシズム布教以前（前スペイン時代）よりおこなわれていた精霊崇拜の形態と深いつながりを持つものと考えられる。サマハンという共同体においてシャーマンは伝統的な手法により聖なる判断を人々に提示する。教会を中心とした人々の宗教生活がルーティン化され、また農民の生活秩序が大きな変動にみまわれ社会不安が増大するなかで、上述のようなシャーマニズムは人々の不安・不満の解消、意識の活性化、連帯の強化という面で独自の社会的機能を果しているといえよう。シャーマンのメッセージの内容分析、シャーマンが宿す諸聖霊のハイラキーと格づけの考察をおこなうとともに、キリスト教化の度合いの低いフィリピンの山地民族の間にみられるシャーマニズムの様態との比較考察をすすめていくのが今後の研究課題となる。

【宮委委発会南研函(第)】

△スニマ一サののくヨリトて

界世姓宗の人くヨリトて献平

(昭和58)又奥田幸

昭和58年度 南方海域研究センター特定研究委員会委員名簿

(58. 2. 16現在)

氏 名	学部等	内 線
田 代 一 男	教 育	3 7 5 2
田 尻 英 三	教 育	3 7 2 3
早 坂 祥 三	理	4 3 1 0
梶 橋 次 雄	医	7 - 2 1 0 9
片 山 忠 夫	農	5 4 8 0
有 隅 健 一	農	5 4 1 0
岩 切 成 郎	水産・南海研	6 - 3 6 0 2 0 5 3
平 田 八 郎	水 産	6 - 5 3 0
東 川 勢 二	水 産	6 - 3 8 1
茶 円 正 明	水 産	6 - 3 0 1
新 田 栄 治	教 養	5 7 1 2
中 野 和 敬	南海研	2 0 5 4
井 上 晃 男	南海研	2 0 5 5
寺 師 慎 一	南海研	2 0 5 6
寺 田 勇 文	南海研	2 0 5 7

南海研だより No.9 昭和58年5月16日発行

鹿児島大学南方海域研究センター

〒890 鹿児島市郡元一丁目21-24 電話 0992(54)7141 (内線)2058